

日本からのパラアスリート支援

東京の武蔵野市役所からの現職参加で、エルサルバドルに青年海外協力隊員として赴任したのは2006年から2008年の2年間。CONAIPD（障害者総合審議会）で、CBR（地域に根差したリハビリテーションプログラム）の普及のため、同僚とともに全国を飛び回り、各地域の障がい者の調査や啓発活動を行いました。



エルサルバドルについて印象に残っているのは、周りの人の優しさと、濃密な人間関係です。日本人とは違った優しさ。日本人の多くは、人に気遣ったさりげない優しさを持ち、エルサルバドル人の多くは、とてもオープンで積極的な優しさを持っていました。そのどちらも、素晴らしいと思います。

帰国して7年が経過し、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を5年後に控えた2015年の秋に、オリンピック・パラリンピック担当の職務につきました。エルサルバドルの人たちのため、特に現地の障害のある人のため、いつかまた何かできればと思っていた自分としては、東京でパラリンピックが行われるタイミングはまたと無い機会だと思い、そして武蔵野市の市民のためにも何らか活かすことが出来ないかと考えました。

上司の理解があり、市長にも認めてもらい、大会2年前の2018年夏に武蔵野市で合宿を受け入れてよいこと、市民との交流イベントを実施してよいことになりました。そして、それを実現するため、エルサルバドルに関わりのある多くの人たちと連絡を取り、「エルサルバドルのパラアスリートを応援する会」を発足し、渡航費用・滞在費用を集めるためにクラウドファンディングを行いました。多くの個人、そしてエルサルバドルに関わりのある企業の支援もあり、無事に資金を集めることができました。また、市役所でのオリンピック・パラリンピックの仕事に関わりを持った競技団体や、エルサルバドル協力隊OBなど

の縁によって、かなり密度の濃い、素晴らしい練習環境を整えることが出来ました。そして、2018年8月29日から9月6日の8泊9日間、パラ陸上・パラ卓球・ボッチャの3種目の選手とコーチを一人ずつ、合計6名を迎え入れました。

■来日したエルサルバドル、パラアスリート



左 : Josue Damián Mora

Regaladoさん 卓球・T10
クラス（立位・軽度）

中央 : David Enrique

Pleitezさん 陸上・T37ク
ラス（立位走行可）

右 : Rebeca Dayana Duarte

Linaresさん ボッチャ・
BC2クラス（上肢での車椅子
操作がある程度可能。
自力投球可能）

日本トップクラスのアスリートとコーチと合同練習を行う機会を持ち、密度の濃い練習の中でも地元住民との交流や、日本文化の体験なども行いました。詳細は、以下のリンクをご覧ください。

【プロジェクトの報告】

<https://a-port.asahi.com/updates/salvador/>





エルサルバドルの隊員仲間であった妻をはじめ、様々な協力隊関係者・大使館職員の皆さまなどに支えられ、本当に良い経験をしていただけたと思います。選手団を率いていた Gerson コーチが、最終日に市役所へ表敬に来てくれた時に挨拶の最中、涙で声を震わせていた姿が印象的でした。

この経験を糧にして、エルサルバドルへ帰国した 3 人のアスリートが奮闘していることを耳にして、嬉しく思います。2020 年の東京で再び会うことができれば、それに勝る喜びはありません。もしそれが叶わなかったとしても、2024 年のパリ、2028 年のロサンゼルスを目指して頑張ってもらえたらと思います。その姿が他のエルサルバドルの人たち、特に障害を持つ人々を勇気づけてもらえたらと思います。

また、同行したコーチの 3 人も、日本のコーチと情報交換したり、トップアスリートの練習を見たりして、多くのことを学んで持ち帰っている様子を目の当たりにしました。彼ら・彼女らが、この経験をエルサルバドルで次世代を担う障害者アスリートの育成に役立ててくれていると信じています。

宮本 亮平（みやもと りょうへい）

2006 年から 2008 年までソーシャルワーカー隊員として活動。帰国後は派遣前の配属先である武蔵野市役所に戻り、ラグビーワールドカップ 2019 の担当者として同大会の成功に携わった他、現在は東京 2020 オリンピック・パラリンピックとの担当として勤務している。